ある小さな物語

石ノ森アイ 著

ある小さな物語

石ノ森アイ 著

ある小さな物語

――わが家のキリスト教史――

――寺小屋回顧――

佐々木アイ著

まえがき

本書が収める二つの文章のうち、はじめの「わが家のキリスト教史」は旧作である。

私はこれを十五年前、満七十歳のよわいに達した時、「老い」の下り坂が目の前に急傾斜しているのを見て、今のうちにぜひ「わが家のキリスト教史」を書いておきたいという念願を起した。そして極めて不出来ながら書き上げて、「ある小さな物語」と題して小冊子を作り、お世話になった先生方や友人知己後輩の方達に贈ったのである。主としてキリスト教同信の方々である。

うれしい書評や読後感や誤りのご指摘を書いて送って下さった方達が多くあって、私は深く感謝している。

その小冊子が残り少なくなった頃、フトした機会からキリスト教関係以外の方達に読んでいただいて、また別のありがたい反響をいただいた。それでもう絶版ときめていた「ある小さな

物語」を、初版の際の誤植や誤りを訂正した上でもっと他の方達にも読んでいただきたいという念願を起した。

再版するとなるとお添えものに何かも一つ作文を書き添えたいと思い立った。

すると前の時と同様に、今度も内なる声がしきりにささやく。

「まだ懲りもせずこんなことをたくらんでハッスルする。あなたの悪い癖ですよ。止めときなさい。恥の上塗りはともかく、いい年をして心身をこわし、いのちを縮めることにもなり兼ねない。悪いことは言わないから止めときなさい。おカネもたくさん要ることだし」と。

しかしその切なる諌めの声に耳を蓋して、やっぱり書こうとするのは、私が持って生れて、八十歳も半ばに達したのに、なおかつ、なおらない一刻さと愚かさの故であろうか。

とにかく筆をとって、お添えものの「寺小屋回顧」を書くことにした。

目次

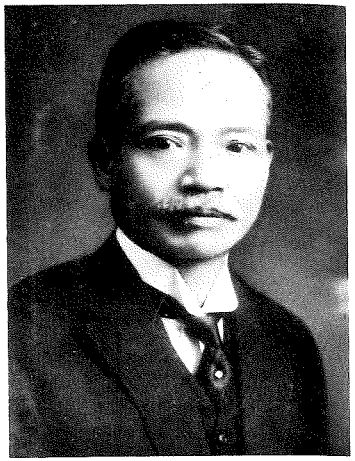
まえがき……1
第一部　わが家のキリスト教史……7
口絵
はじめに……9
仏数とわが家……11
ヤソの絵・三文字屋・ビロードおとめ……24
母とキリストへの入信……33
京都教会・洗礼……46
祖母の改宗……55
姉の結婚……65
松山・祖母の死……73
父と母の死……79
おわりに……86

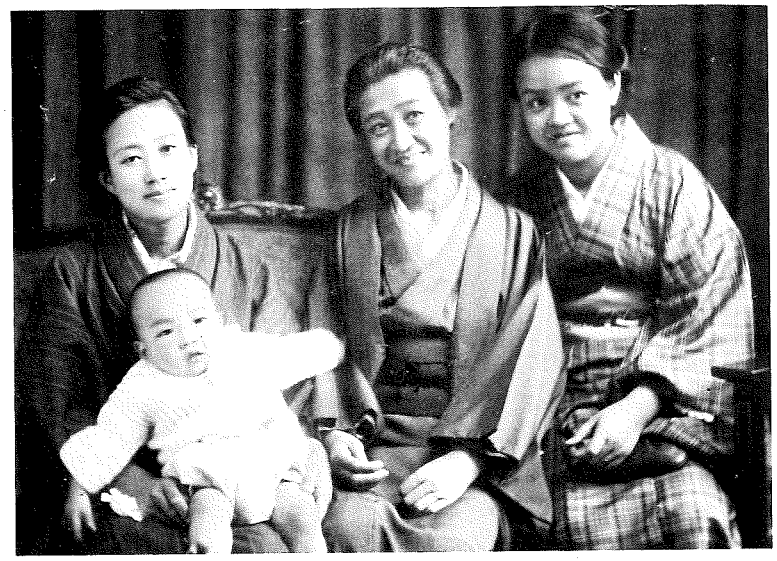
第二部　寺小屋回顧……89
口絵
花の同志社女専生……91
学生運動……93
教養講座……99
三つの理由……104
ミス・デントン……111
車内整理……114
禍、転じて福……115
徹夜の粛礼……119
キリスト教教育……120
国際教育……121
オペラ……122
開かずの黒門……123
卒業旅行……126

記念劇……134
謝恩パーティ……137
卒業式……138
終章……141

第一部　わが家のキリスト教史

上：母 佐々木浪
昭和10年頃
右上：祖母 佐々木とめ
右下：姉 佐々木玉子
大正２年頃





上左：太郎　右：村井保固　明治34年頃
下：左から姉玉子と長男道也，母浪，アイ（著者）
　　大正14年頃

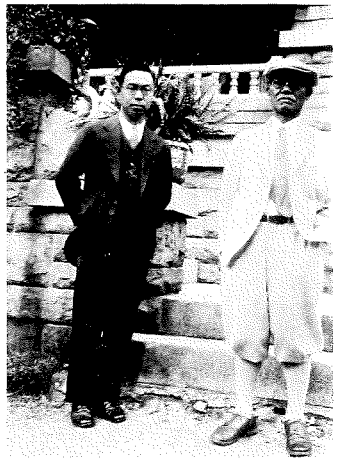
京都教会老婦人会の記念
上段後中央：E.M.ケリー夫人
二段目：左端 祖母とめ，中央 新島八重子未亡人
　　大正６年頃

はじめに

「ひとつ『わが家のキリスト教史』というようなものを書いてみたら……」という想念がフラリと私の胸に浮かんできたのは、昨年もまだ春浅いころ、バスにゆられていた時のことであった。爾来、この発想は私の頭に固着してしまった。固着しただけでなく、次第に幅ひろくエスカレートするようにさえなった。

一方には又、そんなものを書いたところで、誰が読んでくれるという当てもなく、骨折り損のくたびれもうけもいい所、早々によした方が賢明だという自戒の声もさかんに聞こえてくるのであった。

けれど、何をかくそう私も当年とって七十歳！　月並みの言葉をかりていうと、思えば遙けくも来つるものかなという感慨である。ふりかえる来し方は遠く長い道程であるけれど、そこにある私の人生内容たるや、無気力で恥じ多く、お粗末空疎なだけのものであった。面目次第もない。しかし、その間に私がいただいた神の愛、親きょうだいの恩、そして周囲の人達の厚



左：村井太郎
右：村井保固
帝国ホテル前にて
大正13年頃

京都教会の日曜学校の集い
後方　京都教会正門．左後方　同信館
大正５．６年頃

第二部　寺小屋回顧

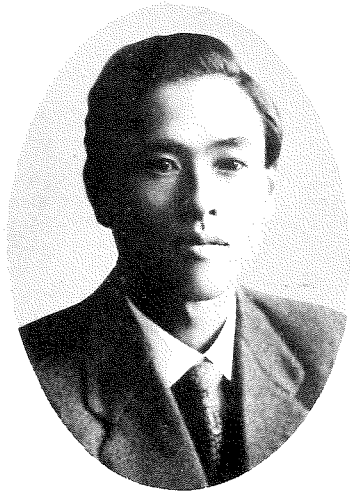
右：新島襄先生
下：同志社女学校正門
「同志社女子部の百年」より

上：晩年のミス・デントン 「京都教会百年史」より
下：女専英文科生 ジェームス館前にて
後列右端著者．その左 ミス・デントン 大正11年

濱田耕作先生（西洋史）

藤井健次郎先生（倫理）

務台理作先生（哲学）



恒藤　恭先生（法律）

同志社女専卒業記念
英文.家政両科卒業生. 大正12年3月. ジェームス館前にて

上：修学旅行．箱根にて 左端 大橋先生．右端 ミス・デントン 大正11年９月
下：デントン・ハウスにて 京都ＹＷＣＡの集会 大正10年頃

貞明皇后行啓記念 大正13年12月
前列中央：新島八重子未亡人．右 海老名総長

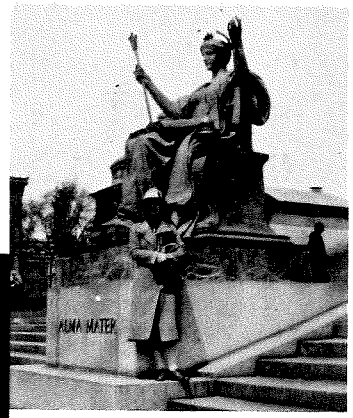
ニューヨーク・ＹＷＣＡ外国人留学生代表．夫々お国振りの衣裳で出席
左端ギリシァ代表 右端メキシコ代表 左から２人目著者

花の同志社女専生

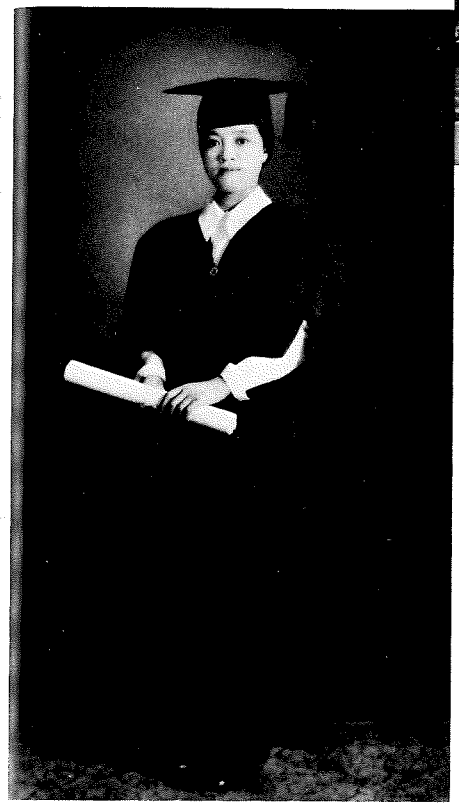
昔々、遠い昔、大正九年から十二年（一九二〇―一九二二）まで、私は京都の同志社女学校専門学部の花の（?）英文科生であった。

同志社は明治教育界の先覚者・新島襄の創立による、キリスト教を建学の基礎とした、明るい自由の空気の満ちたハイカラな名門校である。新島襄は、幕末の元治元年（一八六四年）、鎖国、海外渡航禁制の日本から苦労してアメリカに渡り、明治三年アモスト大学を卒業、明治七年アンドーバー神学校を卒業して帰国。明治八年十一月仏教の地盤牢固たる京都に、アメリカン・ボード宣教師デーヴィスの協力で同志社英学校を創立した。彼はその翌明治九年には早くも女子教育の先鞭をつけて、女紅場（にょうこうば）と称する女子塾（後の同志社女学校）を開いたというから、時代を先どる先覚者の明があらわれている。そこには寄宿生四名、通学生八名が収容されていたというから、同志社の女子教育の歴史は古く長い。

それから幾多の紆余曲折を経て、明治三十四年に同志社女学校専門学部という女子教育の最



コロムビア大学
Alma Mater 像の前にて.
昭和４年　著者



コロムビア大学社会科学科卒業記念
昭和５年６月．著者

永世(とこよ)まで　心の空に
響きわたりて　絶えせぬを
真昼も夜半も　なれが音に
神の召したもう　み声きかまし

の荘重なメロディに送られて、私共はここにめでたく卒業して、やがて夫々の人生に巣立って行ったのである。

聴講と、ノートを取る事に明けくれて、ゼミも、グループ・ディスカッションもなく、研究テーマを持って校外に出てインタビューをしたり、図書館で資料を繰ったりすることもなく、図書館そのものも無かったし、卒論など問題外――こう言った当時の「女専」は、現在の「女子大学」の原始型であったと言えよう。謂ば「寺小屋」である。

素朴で、可憐で、しかし将来に向って、夢や可能性を多分に秘めた、なつかしい寺小屋！その寺小屋のお蔭で、私は若き日にキリスト教信仰に基いた、心ゆたかな人生を指し示され、又、学問という深遠な世界の、ホンの末端でも垣間見ることが出来、その世界へ志向するようになったのは幸わせであった。

終章

この文章を綴っていて、これは如何にも私の一人合点に過ぎるのではないかと気付いた。それで昔を知る人とチェックしてみたい、と考えて白羽の矢を大石悦子さんに当てた。

大石さんは女専の時私と同級で、普通学部時代から成績優秀、評判の良い生徒であったが、女専でも勉強家で、成績はいつもトップ・クラスを占めておられた。同志社大学がその門を女性に開放して、男女共学となった時、他の三人の学生と一緒に、率先して最初の女子学生として入学された。卒業後、彼女は結婚して家庭の人となられたが、その後も同志社女学校同窓会のために活動し、推薦されて同志社評議員となり、現在も同窓会京都支部の役員で、母校への貢献度の大きい方である。

白羽の矢を当てられた大石さんは、私の求めに快く応じて下さり、今年七月のある日、同窓会の会合のある忙しい時間を割いて、Kホテルに私を訪ねて下さった。ホテルのロビーで、私の部屋で、或いは食堂で、語り合ううちに、タイム・トンネルを逆行し、六十年の昔に戻り、

二人は袴姿の女専生がジェームス館の南面するポーチの石段に腰をかけて、他愛なく話し合っているような錯覚に陥ち入るのであった。

先生方のニック・ネームや口癖、クラス・メートの誰彼の噂など、話題は尽きない。

「務台先生の哲学のクラスで、ウインデルバンドの講義を聴いたなァ、大石さん」

「『万有は流れる。万有は流れる』と先生言うてはった」

「ヘラクレイトスの『パンタレイ』という言葉、私今でも覚えてる」

「先生の講義の内容、覚えている？　大石さん」

「そんなもの覚えてやへん」

「他の先生方のは？」

「中村艶子先生のテニスンの時間で読んだ『イノック・アーデン』は面白かった」

「そう。あの本、私今でも大事にしまっている」

「信原、原口、目賀田先生等の英語の時間はよう覚えている。目賀田先生のカーライルの翻訳はむつかしかった」

「濱田先生や倫理の藤井先生の講義の内容、覚えてる？」

「なァーンにも。みんな忘れてしもうた。跡かたもあらへん。サッパリしたもんや」

と大石さんは自慢そうに言い切った。

私は安心した。優等生の彼女にしてこんな具合に一切忘れ去っているのなら、私が記憶していないのは当然であろう。優等生と否とにかかわらず、立派な先生方の講義の内容は、残念乍ら忘れ果ててしまったが、その先生方とのふれ合いや、伝統ある校風から感化されたものは、六十年を経過しても消え去るものでないことを、二人とも心に泌みて感じた。

寺小屋回顧と題してこの文章を書き終えるが、読み返してみると、如何にもお粗末で、頼りないものである事を感じずには居られない。思い出すままに書いたものであるが、それも六十年の歳月の間に、或いは風化し、或いは欠落している。思い違いも書き落しもあろう。まだまだ書きたい事柄もあったが、紙面の都合もあるので割愛した。輝かしい大同志社の歴史の中にあって、ある一時期の女専時代のキャムパス・ライフの一端として、この拙文を読んで頂ければ有難いと思う。

終りに、この「寺小屋回顧」を苦労して書いている私を励まし、アドヴァイスを与え、筆の運びを祈りと期待を以て見守って下さった方々、並びにこの小冊子の発行に終始あたたかい励ましを頂いた森村商事株式会社の福永郁雄氏と山桃舎の横田尚枝氏に、厚い感謝を捧げる。

一九八六年十月　代々木にて

著者略歴

佐々木アイ
明治34年８月京都に生れる
大正12年３月同志社女学校専門学部英文科卒業
昭和５年６月コロムビア大学社会科学科マスターコース卒業
昭和11年４月自由学園教師となる
昭和19年３月同退職
昭和20年ＧＨＱに勤務　後，共立薬科大学，桜美林短期大学各講師歴任
現住所　東京都渋谷区代々木５―15―10
代々木の杜ハイツ511号

ある小さな物語
―わが家のキリスト教史―
―寺小屋回顧―

一九八六年十一月二十一日発行

著　者　佐々木アイ
発行所　山桃舎
東京都千代田区神田神保町二ノ二〇
電話東京０３―二六四―七三九四番
制　作　山桃舎

ISBN4-924463-15-9 C0095 ¥2000E